

【JIDF学生文化デザイン賞2019 受賞者インタビュー】

◆国立奈良工業高等専門学校 末永共助さん&須田敦先生

—末永さんが学生文化デザイン賞に応募した動機は？

末永共助さん(以下、末永):以前から構想していた認知症プロジェクトを進めるにあたって、どのような分野のコンテストに出そうかと悩んでいたところ、校内の掲示板でテーマが“なんでも”の「学生文化デザイン賞」に出会いました。

—この賞について、先生の第一印象は？

須田敦先生(以下、先生):「学生文化デザイン賞」の“なんでも”と大きく書かれたポスターを受け取った時は、何の賞なのかよく分かりませんでしたが、内容を見て面白そうだなと思いました。当校には外部からさまざまな学生向けコンテストなどの情報が寄せられます。個人的には、このような賞に学生が挑戦することは、学外での評価が得られる良い機会だと思っています。

—この賞に魅力を感じた点は？

末永:いちばんの魅力は、テーマが“なんでもアリ”なことです。テーマがない分、どんなジャンルの人たちが応募してくるのか想像がつかないという、ワクワク感みたいなものもあったような気がします。

先生:学生向けのコンペなどは、応募書類に指導教員の欄があることが多く、学生にとってはそれがハードルにもなるのですが、「学生文化デザイン賞」にはそれが無いので、応募しやすいのではないのでしょうか。

—実際に受賞して、環境などの変化はあったか？

末永:受賞というより、参加したことで日常生活における意識の持ち方が変わったと思います。自分とは違う価値観を持った人たちのプレゼンテーションが聞けたことで、さまざまな視点から物事を見ることができるようになりました。また、考え抜いた上で臨んだ最終審査で評価をいただいたことが、今後の自信へとつながりました。

—学生文化デザイン賞に挑戦して良かったと思うことは？

末永:最も良かったのは、自分と価値観が違う人たちと交流できたことです。特に、審査終了後の交流(ザッツ談パーティ)は自分の中でも印象的な場でした。同じ世代のファイナリスト同士で互いのプレゼンテーション(プロジェクト)について意見を交わしたり、企業(協賛社)の方々の話を伺うことができたりしたことで、とても刺激になりました。

—これから応募する人へのメッセージ

末永:自分の思いつきやアイデアを形にしてみて、それが実際に評価されれば自信にもつながるので、まずは気軽に挑戦してみてください。

先生:テーマに縛りが無い“なんでもアリ”なコンペなので、何かに挑戦してみたい気持ちが少しでもある学生さんにはおススメしたいです。賞金がモチベーションにもなるのもそうですが、なにより第三者の評価は自信になると思いますよ。

末永共助(すえながきょうすけ)

国立奈良工業高等専門学校専攻科に在学中。幼少期からものづくりが好きだった。奈良高専で機械工学を学ぶと同時に、福祉の分野に着目したものづくりに取り組みたいと考えるようになる。中でも認知症に注目し、認知症対策に役立つ新たな機器の開発を試みている。「学生文化デザイン賞2019」では、認知症予防の意識を“遊び”へ変革することを目指す『楽しむ！認知症予防プロジェクト』で、全6社中3社の協賛社賞を受賞。

